中央本通りの白木蓮　　山の手倶楽部 大西　功氏

歴史と自然と、そして私たち

歴史と自然と そして私たち

私たちの住む桂坂は、京都駅のちょうど西、周りを風致地区で囲まれています。桂坂小学校の正門右側にある「規準点No１」に拠ると、海抜は161.53m、北緯34°58′56″、東経 135°40′0″です。気温は京都の街中に比べ約１度低いようです。（資料篇「桂坂小学校観測所・気象観測報告」）

風致地区は、自然の景観を維持するために都市計画区域内で指定されたところですから当然、身近に自然を味わうことができます。

1990（平成２）年といえば学区草創の頃です。「騒音対策モデル事業」の各調査が実施された際に桂坂小学校の５年生83名を対象に「公害教室」も開かれ、「日常生活の中で聞こえてきた音」のうち「いやな音・きらいな音」、「すきな音」について子どもたちにアンケート調査を行いました。11月17日から20日までの間に、各家庭で「聞こえてきた音」です。

行き交う一般車両や工事車両の音、ブルドーザなど造成工事では不可避の音、こうした「いやな音」を耳にする中で「好きな音」を聞き分け、５位以上に次の「音」を挙げています。

小鳥の音	13	ピアノの音（きれいな曲）	10
音楽	8	ＣＤの音	4
フルートの音	2	金属バットで打つ音	2
ラジオの音	2	チャイムの音	2

当時の小学生たちは、建設の槌音が響き、しかも植栽された樹木もまだ十分生育をみない公園や屋敷周りに朝夕、緑をたずねてやって来る小鳥のさえずりや、流れてくるピアノ、フルートの音色に快さを感じていたのでしょう。

この快い音色のみならず、桂坂の、四季折々に見せる自然の変容も、私たちの目を楽しませ、日常の憂さを忘れさせてくれます。

ところで、そこここに歴史を感じさせ、自然に恵まれた大枝の地に今日の桂坂が出来るに当たっては多くの知恵が集められ、また、新生の街の景観、生活空間の維持にも広い視野に立った細やかな配慮が払われてきました。

この「桂坂」について、先ず「地名」に即して歴史をたずね、次に開発の面からその街づくりの足跡をたどってみます。その後、居住するものの立場に立って活動し、新しい街の維持と更なる発展に寄与するところ大である自治連合会や自治会、あるいは各種団体の誕生とその活動の目的などを記しておきたいと思います。

桂坂の地名をたどる

山田まゆみ

桂坂の位置する西京区は、1976（昭和51）年、右京区から分離し、同年には洛西ニュータウンの入居も開始されました。その７年後の1983（昭和58）年に桂坂の造成が始まり、1986（昭和61）年には、第１期の入居となります。

私たちの街「桂坂」は、今でこそ交通や教育施設、自治会組織など、その当時と比べれば随分、整ってきましたが、歴史都市京都の中では「新しい街」です。

しかし、ここ大枝の歴史は古く、旧山陰街道を歩いてみると、淳和天皇御母陵、宇波多陵、伝大江関跡、さらに老ノ坂までたどれば、首塚など、実に多くの史跡に遭遇します。また桂坂センターの東には「古墳公園」もあり、この地に多くの歴史が秘められていることがわかるでしょう。その歴史のすべてを辿るには、時空ともあまりにも広大ですが、せめて私たちが住む街の地名の由来くらいは知っておきたいものです。

大　枝

桂坂の街は、大枝北沓掛町、御陵大枝山町、御陵峰ヶ堂町の３つの町名で構成されています。因に「桂坂」というこの街の名は、西洋環境開発が販売にあたって命名したものです。

現在「大枝何々」と称される地域は、旧道沿いを含め広い範囲に及びますが、そもそもは1888（明治21）年に沓掛町、塚原村、長野新田村の３ヵ村が合併して大枝村として成立したものです。当時は京都府乙訓郡に属しており、京都市右京区へ合併されるのは、かなり後の1892（明治25）年です。

歴史の中の大枝

では、この３村の合併により新たに付けられた「大枝」という地名は、どこから来たのでしょうか。

古代史を紐解くと、山城国乙訓郡大江郷という名が見えますが、その範囲は定かではありません。

一説には、桓武天皇の母、高野新笠（たかののにいがさ）の実家が大枝にあり、その新笠の母である土師真妹（はじまいも）が、桓武天皇から大枝という姓を賜ったことに由来するといわれています。しかし、土師真妹の墓は、大和国平群郡（奈良県生駒郡）にあることから、真妹は大和に住んでおり、大枝姓を賜ったのは、娘である新笠の墓・大枝陵の所在地に因むものともいわれています。

また、山陰道の老ノ坂峠の峰は大枝山とよばれていますが、18世紀末の『都名所図会』によると老ノ坂は「大枝の坂」と表記されています。この大枝山は、源頼光の酒呑童子退治の伝説と結びつき、今も旧山陰道沿いに首塚大明神

の祠があって、頼光の退治した酒呑童子の首塚であると伝えられています。この酒呑童子で有名な「オオエヤマ」は現在の加佐郡大江町と与謝郡加悦町の境の山であるという説が有力ですが、大枝の人々は、山城国と丹波国の国境であった大枝こそが、その地であると信じているのです。

そもそも「大枝」は、平安京建都に際し、この辺りから木材を供給したことに由来するといわれる地名ですが、その他にも様々な史料があり、素人としては特定することはできません。しかし、「大枝」という地名は古くから伝えられた地名であることだけは間違いないでしょう。

沓　掛

沓掛という名は、交通の要衝によく見られる地名で、一般に「履物を懸け置く」ところに由来するとされます。旧山陰道は京から山陰へ通じる重要な街道であり、旅人は、大宮通りの丹波口から西七条、そして桂川を船で渡って樫原、塚原、沓掛を通り、丹波、丹後へと歩いたのです。樫原には、現在も樫原本陣跡が残っていますが、かつてこの街道沿いに旅篭や茶店が軒を連ねていた時代を想像すれば、この地に沓掛という名が付いたことは、ごく自然の成り行きと思われます。

御陵大枝山

この地名の大枝山は当然、先の「大枝山」から来たのであり、また、その意味が天皇、皇后の墓所であることを示す「御陵」も、旧街道沿いに点在する御陵を思い起こせば不思議ではありません。

しかし、この地になぜ多くの御陵が存在するのかを考えるには、現在、桂坂センターの東にある古墳公園に残されている古墳の作られた時代に逆上る必要があるでしょう。

桂坂の右の扇状地には集落跡が、そして、松尾山から南南東方向に派生する丘陵上では数多くの古墳が発掘されています。桂坂に近い洛西、大枝地区（大枝東長町、北福西町）で1971（昭和46）年に発見されたナイフ型石器は、驚いたことに後期旧石器時代の物であり、また、縄文初期の土器なども発見されています。このことから、この時期においては、この辺りが狩猟、採集を中心とした古代人の生活の場であったことが推測できます。

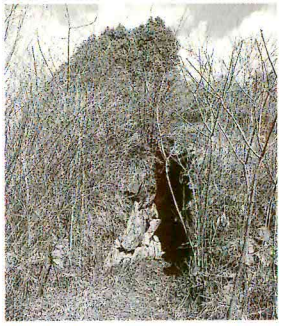
その後古墳時代に入り、樫原周辺にその時代の首長墓であろうと考えられる一本松古墳、百々池古墳、天皇の杜古墳などが作られます。

桂坂の古墳

さて桂坂の古墳ですが、これは古墳時代後期のもので、大枝山古墳群と呼ばれ、福西古墳群、沓掛古墳群、塚原古墳群と共に群集墳です。このことは、この時代に、この丘陵や山あいが墓域として利用されてきたことを示すものでしょう。

大枝山古墳群は20基を超える大群集群であり、1980（昭和55）年以降、何度となく発掘調査が行われました。それらの古墳は円墳で、形状をよく残している10数基が現状のまま今も古墳公園に保存されています。

7世紀前半には、これらの古墳時代は終わりを告げますが、長岡京以降に桓武天皇の生母高野新笠の大枝陵などが築かれていくのも、この地が古代貴族の葬地であったことと無縁でないかもしれません。つまり古墳時代以来、この地は畏敬されるべき神聖な地であったということであり、それを示すのが「御陵」という地名なのです。



峰ヶ堂

桂坂のロータリー以東、いわゆる東地区は、「御陵峰ヶ堂町」と呼ばれます。この地名については、松尾山の山麓を流れる西芳寺川の谷にあった最福寺の存在に触れなければなりません。最福寺は、1176（安元２）年に延朗という僧により開山され、南北朝時代には多くの堂舎や五重塔などが建てられ、かなり立派な寺であったようです。また、当時この辺りが谷郷と呼ばれていたことから「谷堂」とも呼ばれていました。この最福寺と隣接して延朗の弟子の証月房慶政という学僧により建てられたのが法華山寺です。「谷堂」に対し、松尾の奥のこの寺は「峰堂」と呼ばれており、最福時に劣らぬ寺観を有していたといいます。

この両寺は、南北朝の幕明けである1331（元弘元）年の元弘の乱の直後、丘火により焼失します。その後、両寺は復興するのですが、再び応仁の乱（1466）で「谷堂」が、翌年には「峰堂」が焼失し、二度と再建することはありませんでした。

この２つの寺を廃絶に追いやったのは、両寺が、唐櫃越や老ノ坂越という歴史上の交通の要、特に戦時下の要道に位置していたためです。ともあれ、現在の「峰ヶ堂」という地名は、法華寺こと「峰堂」の名残りなのです。

終わりに

以上、桂坂の町名についての由来をたどりましたが、この他にも、地名ではないが、バス停の一部にもなっている「天蓋」や「唐櫃越」の「唐櫃」についての由来にも興味深いものがあります。

新しい街「桂坂」が先人のさまざまな歴史や思いの上に存在することを思うと、いま生きている私たちがこの地を守り育て、より良い街にしていかねばと改めて思います。

桂坂の開発

私たちの住むこの桂坂では、庭先に飛来した小鳥が枝を移りながら花の蜜を吸い、葉裏の虫を器用に捕る愛らしい姿や、さらには幹線道路沿いの、さして水量の多くない人工の川の上をセキレイが滑るように翔ぶさまさえ目にすることができます。

私たちが身近で鳥の姿やさえずりに接し、心を和ませうるのは、「人と自然との共生」を基本に据える街づくりがここに来て結実しつつあることの現れでしょう。

この地はもともと、洛西ニュータウンと同じように竹藪や柿畑の多い丘陵地帯でした。1960（昭和35）年の半ばより洛西ニュータウンの開発・造成が京都市の手で始まり、続いて民間、すなわち西武都市開発（現西洋環境開発）によって小畑川の北に続く丘陵地の山林などが切り拓かれていきました。山が削られ谷が埋められて、山容も一変、一大造成地が生まれたわけです。

この間の事情を、大枝地区在住の田原正夫元大枝自治会長にお聞きした折りの「聞書き」（広報『桂坂』７号～８号）を基に再構成してみます。

桂坂の昔

かつてこの桂坂は、田と竹林と柿畑に囲まれた自然の恵み豊かな里でした。標高120～180米位の緩やかな傾斜面を中心として丘陵部を削り、沓掛北部と塚原北部の下狩川の谷を埋めて造られた街です。

現在、「天蓋公園」と呼ばれているあの辺りは、「『てんがざき』と呼ばれ、東と西に同じ高さの小高い丘があって、男の子たちの兵隊ごっこには格好の場所でした。女の子たちは、わらび採りでもしていたのでしょうか。それとも昔、水晶が出たそうなので、宝探しをしていたのかも知れません」。

造成までの苦労話

「この静かな里に大造成の話が持ち上がった時には、様々な意見がありました。しかし当時の役員たちは、将来的な地域の活性化という点からその必要性を説き、人びとの同意を得ました。ところが土地を売却したものの、造成までには長い年月を要しました。それは、昭和40年に国道９号線のバイパスが開通すると、洛西ニュータウンの建設の方が先に進められていったからです」。

この間に、「地元のものが一番苦労したのは、猪の被害です。人の入らなくなった山や田は、猪の格好の遊び場と化し、時には人家のすぐ裏にまで姿を現すのです。被害の続出にワナを考えたり、コールタールをまいたり、その対策に追われることになりました」。

このような予想だにしなかった事態の発生のため、一日も早い着工を願った大枝の人たちは、西武都市開発と共に許可を求めて奔走しました。その結果ようやく昭和58年、桂坂の造成が開始されるのです。

1979（昭和54）年の桂坂

1986（昭和61）年の桂坂

造成の開始とその工夫

「何しろ一つの街を造るという大造成です。地元としては当然、雨水による土砂崩れや田畑への被害を心配しました。西武都市開発とも十分話し合い、万が一、被害の出た時のためにと農協に積立てもしました。しかし、その心配も杞憂に終わりました。というのも、自然の地形や流れを活かした造成が行われたからです」。

桂坂は「緩やかな丘を削り、谷を埋めて造られた街。例えば、現在、西友桂坂店のある辺りも、当時は〈百日谷〉と呼ばれる谷でしたが、もともとの谷の部分に穴あきパイプを埋めて石を敷き、その上に土をかぶせ、排水に工夫が施されてあるそうです。大きな沈砂池が作られ、雨やドロがそこで止められたために、心配された大雨でも被害はありませんでした」。

ここのところを西洋環境開発の話で補えば、盛土を馴染みやすくし、滑りを防止するために、「あらかじめ表土を取り除いた斜面地には、現況の地盤面に段切工を施」し、「(その) 最深部には暗渠工（土質によってはサンドマット工を採用）により、集水管などの透水施設を設け」ているので「湧水は地下に滞留することなく、宅地外部に速やかに導かれる」というわけです。(西洋環境開発発行・桂坂ニュース『るりびたき』1999.8.25)

「驚いたのは、その重機の大きさです。今まで見たこともないようなもので、その腹の中に土をすくい、それを薄く地面に敷き、その上を重機が何度も往復しました。それはもう地面が固くしまって、これなら地崩れなど心配ないと思いましたよ。大きな岩盤につきあたり、火薬を使ったこともありましたが、その時も安全対策はきちんとされていましたね」。

地元の理解と協力

このように地元の方が見守り、そして理解と協力の下で造成工事は着々と進み、「桂坂」の街は出来てきました。

「お互いに相手の立場に立って考えること。自分勝手ばかりでは地域は育ちません」——田原氏のこのことばからは、ご自身の住む地域を愛し、地域の発展に尽力され、人とふれあって来られた歴史が感じられます。

桂坂の街づくり

人と自然との共生

山林を大々的に切り拓き、自然の変容著しい「桂坂」の開発に際しては、マスタープラン策定の段階より、元の自然をできるかぎり復元すべく「まちづくり委員会」「自然形成委員会」など4つの委員会がつくられ、その中で京都にゆかりのある有識者や地元の人たちの意見を求め、様々な角度から検討が加えられていきました。

この丘陵地帯には6、7世紀に起源をもつ「大枝山古墳群」がありますが、当然、次代にひき継ぐべき文化遺産です。この点に配慮しつつ開発を進めるために「古墳公園委員会」が結成され、また、この土地が多くの野鳥の棲息地である点に留意して、京都野鳥の会を初めとする有識者や地元民よる「バードサンクチュアリー委員会」まで設立されています。

桂坂野鳥園

この緑多く色彩豊かな自然環境は、実は、自然そのものではありません。自然を残しつつ大胆に人の手を加えて造られたところの、いわば「人工の自然」です。野鳥園がその好い例でしょう。

開発造成に伴う樹木の伐採、重機や大型ダンプの騒音、舞い上がる砂塵などによって当然、棲息する動物はねぐらを追われ、植物は生育の環境を失います。そこで野鳥の場合は、事前に時間をかけて棲息していた種類を調査し、開発完了後にその鳥たちを呼び戻すことができないかが真剣に検討されました。

その後、開発のマスタープランの基幹ともなる「人と自然との共生」という考えのもとに、桂坂のちょうど中央に鳥の生態にかなった環境、つまり池や湿地、落葉の堆積する樹林など人工的で、鳥にとって好ましい環境が造られていくのですが、いま私たちの庭前を訪れる鳥の種類が多くなったのも、鳥にとっての自然が「復元」されつつあるからでしょう。

今後は私たちが「自然との共生」を念頭におきながら、この桂坂の「自然」のたたずまいを私たち「人の工み」と心遣いで大切に守り、次代に送る必要がありましょう。

「騒音対策モデル事業」

自治連合会が設立されて間もない1990（平成２）年10月から翌３月にかけて、自治連合会・西京保健所・市衛生局環境保全室の３者による「騒音対策モデル事業」の一環として種々の調査が行われました。

これは、都市生活の複雑多様化にともない増加傾向にある「生活騒音」問題を解決するには、「地域社会のコミュニケーションの育成や日常生活におけるモラル・マナーに関する自主的なルール作りなどによる良好な近隣関係を築くこと、騒音防止意識を高めること、そして騒音防止に対する知識を広めることなどにより騒音問題の発生しにくい地域社会を作っていくことが必要である」との考えに拠るものです。

「住みよいまち『桂坂』の静かな街づくり宣言」

各自治会、桂坂小学校の児童の協力のもとに実施された調査結果は、「住みよいまち『桂坂』の静かな街づくり宣言」に集約されるとともに「報告書」（60頁の冊子）として全戸に配布されました。

この「宣言」には桂坂自治連合会の「街づくり」に対する考えの一端が披瀝されています。

私たちは、この「桂坂」を生涯の住みよい町として、今の良い環境を守り、愛し、この環境を後世に伝えていきたいと願い、この１年間静かな街づくりのためのいろいろな活動に取り組んできました。そこで、私たちの総意としてここに「住みよいまち『桂坂』の静かな街づくり宣言」をするものです。

■私たちは‥‥

より住みよい町とするために、お互いに迷惑をかけない、思いやりと助け合いの近隣関係を築いていきましょう。

私たち自身の手で、町を守り育てるため、みんなでより良いコミュニケーションづくりに努めましょう。

■住みよい環境を守り、育てるために‥‥

1．自動車・オートバイに乗る時は、不必要な空ぶかしやクラクションは控え、地区内では、安全速度を守り静かな運転を心がけましょう。

なお、子供達の安全と他の車の通行を確保するため長時間の路上駐車はやめましょう。

2．ピアノなど楽器の演奏は、夜間大きな音を出す曲や演奏などは控え、他の人に迷惑をかけないようにしましょう。

なお、長時間演奏する場合は、窓、扉、カーテンなどを閉めて音が外に漏れないようにしましょう。

3．ペットの飼育は、マナーを守って他の人に迷惑をかけないようにしましょう。

4．花火は、迷惑のかからない広い場所で、時間と後始末に注意して遊びましょう。

5．その他、

(1) 個人個人の生活があります。他の人の生活も考えて、特に早朝深夜は近隣への思いやりと心配りを忘れないようにしましょう。

(2) 隣近所とのあいさつや自治会の行事に参加し、お互いのコミュニケーションを深め、友好的な関係を築くことに努めましょう。

(3) 身近なところから、心がけひとつで、だれでもできるこの環境を守り育てる活動に積極的に取り組みましょう。

以上のことに心がけて、暮らしていきたいと思います。

平成３年３月
桂坂学区自治連合会騒音対策モデル事業　検討委員会

桂坂の街と地域社会

この時のアンケート結果から、私たち住民が桂坂の街・地域社会をどのように把えていたかもうかがえます。

問：あなたのお住い周辺の住環境・自然環境をどのように感じていますか。[回答数　969]

大変良い	311（32.1%）	悪　い	19（1.2%）
良　い	511（53.7%）	大変悪い	6（0.6%）
普　通	120（12.4%）	分らない	2（0.2%）

問：あなた（家族）はご近所の方々とのおつきあいについてはどうですか。[回答数　965]

よくつきあっている	199（20.6%）
話し合うこともある	399（41.3%）
あいさつをする程度	329（34.1%）
あまりつきあいがない	32（3.3%）
顔も知らない	5（0.5%）
分らない	1（0.1%）

問：あなたは地域（自治会、少年補導委員会、体育振興会など）の行事に参加していますか。[回答数 961]

よく参加している	230（23.9%）
あまり参加していないが、できれば参加したい	520（54.6%）
あまり参加していないし、これからも参加する気はない	138（14.4%）
分らない	68（7.1%）

住みよい街づくりのためには

最後の項目で求められた「騒音防止や環境保全、より住みよい街づくりなどについてのテーマとなるような標語」

として挙げられたものの中に、例えば次のようなものがありました。

おはようと　笑顔ではじまる　桂坂
心がけ一つで住みよい桂坂
育てよう　美しい心の宿る街
ちょっとした気配りニッコリお隣さん
よい街は　心配りが　行き届き
住み良さは　一人ひとりの　気配りで
思いやる心と心で　よい町を
街づくり　心づかいは　我が家から

総数 104のうち、50%以上の標語に「心がけ」や「気配り」「自覚」といったことばが用いられ、「挨拶」や「声かけ」も15%。その頃の皆さんが、新しい住環境の中で生活していくのに、いかに心の「ふれあい」を大切にされていたかがよく判ります。

この看板は、桂坂口よりロータリーに向かって右側の、カツラの木とおかめ笹の植込みの中に立っています。

この文言が出来あがるまでには一字一句の慎重な検討がなされていますが、ここには、「桂坂」の街づくりの基本姿勢と住環境維持の強い願いが表現されているようです。

私たち、十分肝に銘じておきたいことです。

環境の維持保全の努力

建築協定

桂坂では、街並みの景観を将来ともに崩すことなく維持していくために、宅地の分譲段階で「建築協定」が結ばれています。

この「建築協定」とは、「一定の地域の住民が全員の合意によって、建築基準法や条例よりも厳しい建築物に関する基準を定めて、互いに守り合って行くことを約束する制度」すなわち「合意協定」です。

一人協定

新しい住宅地である桂坂は、マンション地区を除いて建築協定が結ばれていますが、この桂坂地区は、宅地開発時ディベロッパーが一人の段階で（西洋環境開発株式会社、または住宅生協、住宅公団）、京都市長との間で建築協定を結び、建築協定付きで宅地を分譲するものであり、「合意協定」に対して、桂坂地区の建築協定は「一人協定」と呼ばれるものです。

この「一人協定」の特色は、「宅地開発のはじめから望ましいまちづくりを行うことができ、分譲後も良好な環境を維持することができる」ところにあります。

建築協定委員会

1995年の初めにはすでに桂坂の建築協定地区は全部で22ありました。各地区には、「それぞれ22の地区の特色を活かしてまちなみを育て」ていくうえで「非常にこまやかな内容についての規定」が設けられ、「壁の位置は言うに及ばず、敷地の最低規模、屋根の勾配、軒の寸法、生け垣、柵の材料から壁の仕上げの色や材料について『桂坂地区』全体での調和を図りながら、それぞれの地区での特色に応じた規定が決められています」。

各地区には建築協定委員会があり、住みよい街を維持するために建築協定に則って活動しています。桂坂地区は、京都市建築協定連絡協議会（同会副会長の一人は、桂坂第15・17地区――にれのき建築協定地区在住の別所貞俊氏）にも加盟し、その広報紙『建築協定だより』を配布するとともに、各地区で作成した広報紙で会員に新しい情報を提供しています。なお、平成９年（1997）頃より協定の認可後10年を経過した地区から逐次、自動更新されています。

私たちは、桂坂の景観・街並みを乱すことなく維持していくことを願う「建築協定」を、宅地・建物を購入すると同時に結んでいることになり、街づくりに参加している、実は重要な一人なのです。

桂坂学区自治連合会発足のころ

自治連合会顧問　湯浅　忍

1987（昭和62）年～1989（平成元）年頃の桂坂はまだ戸数が少なく、かえで自治会としらかば自治会ができ、小・中学校が開校し、さつき自治会が誕生したところでした。住民の全員が移住者で、知らないものばかりでしたから、かえで自治会の場合は予め開発業者（西洋環境開発）が役員候補者10名を選び、住民の承認を受けて準備活動を始めるという手続きをとりました。

1988年４月のかえで自治会設立までには約７ケ月の準備期間を要しましたが、桂坂における最初の自治会づくりでしたから、かえで自治会のことのみでなく、桂坂全体のこと、街づくりのことなどを考えて、随分と協議を重ねました。組織や方針、名前、会則、班づくり、行事計画などの他に、小・中学校の開校準備、自治会館の建設、交通ルール、次に出来る新しい自治会の結成手伝いなど、役員が分担して仕事を進めておりました。

その頃に西京区洛西支所から、自治連合会を作っていただけないかと相談があり、かえで・しらかば・さつきの３自治会長が洛西の指定場所に集まり、大石洛西支所長様、田原大枝自治連合会長様の立会いのもとで連合会の結成を話し合い、合意をいたしました。

たまたま私が選ばれて会長をお引受しましたが、活動経験も浅く微力でしたので、副会長様、事務局長様、役員様の協力をいただきつつ運営に当たっておりました。

初面識の方が多く、会合は議論百出で、意見の調整に苦労したこともありました。しかし、「狭い門よりはいる」（新約聖書）を金科玉条にして、無理をしない、できることから少しづつ実行に移すことに心がけ、役員の皆様にもそれをお願いしておりました。

連合自治会の役員は各自治会から均等に選ばれておりましたが、当時、私がかえで自治会の会長も兼務していた関係で、運営方法や行事など、かえで自治会のやり方を参考にすることが多く、かえで自治会のものと重複したこともあったと思います。

桂坂の開発業者の方針は、桂坂を〈自然と人とが共生できるお屋敷まち〉にしたいということでした。そしてまたこの桂坂の良好な住環境を求めて各地から移られた方々ばかりでしたから、その要求に合うような自治会活動をしなければなりません。

そのことを考えながら協議を重ねて、まずお隣さんへの声かけ運動を起こすためのクリーン作戦、夏祭り、自治会掲示板、バス停待合所、バスの増便、郵便ポスト設置など少しづつ実行に移しました。

当時は好況時で、宅地開発も盛んで、販売も急増し、在任中に７自治会が誕生いたしました。

今年10周年を迎えて時の経つ速さを感じておりますが、桂坂の街も、桂坂自治連合会も充実発展をしており、嬉しいことです。この発展は、菊池会長様、田畑副会長様という名コンビのご奮闘ご活躍と役員様のご協力によるものと考えておりますが、なお一層の隆盛を祈念し、また、21世紀に誇ることのできる桂坂の街となるよう念願しながら、桂坂自治連合会草創期の報告といたします。

自治会と自治連合会

「人と自然との共生」を謳うこの「桂坂」への「移住」は、1986（昭和61）年４月から、桂坂口をロータリーに向かって左側の地域、すなわち、かえで自治会（北沓掛町６丁目・５丁目）より始まりました。

学区最初の自治会――かえで自治会

このかえで自治会は、約７ケ月の設立準備期間に、「何年か先に出来あがる桂坂学区の姿を想い浮かべ、その時に『在るべき姿』を全員で考」え（湯浅忍現自治連合会顧問「新しい酒は新しい皮袋に」・広報『桂坂』50号）、様々な角度から協議を重ねた末に、1988（昭和63）年４月、学区最初の自治会を誕生させました。

「無理をしない、強制しない」・「知らないもの同士の集まりだからふれあいを大切にする」・「できることから始める」という３本柱を立てて組織づくりが始まりました。

自治会の命名に際しては、候補に上った「桂坂」の名はいづれ出来る連合会組織の名称として残しておき、「人と自然との共生」の街づくりにふさわしい樹木の名をもって命名することに決まりました。自治会名「かえで」はこうして生まれました。

また、「ふれあい」を標榜する自治連合会主催の「統一クリーンデー」も発祥はこのかえで自治会でした。

当時の小林健一副会長から「『おはようございます』という町内での挨拶運動、お隣りとの声かけ運動を進めるために、クリーン作戦を行ってはどうかという提案」（湯浅氏前掲文）があり、月に１回、実施されることになりました。これが昨秋で19回を数える自治連合会の一大行事にまで発展し、さらに創始者の願いは、いくつかの自治会で月ごとのふれあいクリーンデーの形で承け継がれ、自治会行事として定着しています。

桂坂自治連合会の胎動

同年５月には２番目のしらかば自治会が北沓掛町３丁目に、翌年４月には北沓掛町４丁目にさつき自治会が生まれました。この３つの自治会は、連合会結成の準備段階から

意見を交換し、桂坂学区の将来像を想い描きながら活動を開始しました。

桂坂小学校の開設準備委員に名を列ね、また、行政からおりてくる各種団体結成の要請にも可能な限り応じていかねばなりません。その他に、国勢調査や選挙の投票学区としての仕事、バスの増発、通学路の安全など学区全域に関わる問題も出始めました。さらに9月には、小学校で児童対象に自転車の乗り方、横断歩道の渡り方など交通安全教室を実施するという桂警察署からの話もありました。

これら継起する問題には各自治会が横の連絡を密にしながら対処していく必要に迫られます。そこで7月初め、こうした問題は各自治会で一旦検討した上で持ち寄り、決定していくことにし、その頃、自治会結成の途上にあった自治会を含め、2名づつ選出された「連絡者」が集まって検討していきました。

桂坂自治連合会の誕生

こうした先駆者なるが故の苦労の中で準備は慎重に進められ、1989（平成元）年7月9日、大石洛西支所長ら立会いの下、3自治会が連合の発足に合意、8月5日、「桂坂学区自治連合会」の「発足届」が市に提出されました。

初代の会長には湯浅忍かえで自治会長、副会長に米田和雄しらかば自治会長と後藤正幸さつき自治会長が選ばれています。

この時から桂坂自治会館が出来る1999（平成11）年までは、自治連合会の役員会など小規模の会合は、会場も各自治会の会館のもち回り。もちろん各自治会にしても、設立準備の段階や自治会の会館が建つまでは、それぞれの団地開発業者の事業所やインフォメーションセンター、あるいは学校やふれあいの里など既設の施設を借用して会合を重ねざるをえませんでした。

その後に発足したのは1989（平成元）年11月のあかしあ自治会（北沓掛町2丁目）と1990（平成2）年4月のひいらぎ自治会（御陵大枝山町6丁目）の2自治会。この2つを加えた5自治会が集まり、同年5月、第1回桂坂自治連合会総会が桂坂小学校ミーティングルームにおいて開催されました。因に、当時の各自治会を構成する世帯数は次の通りでした。

かえで自治会	267	あかしあ自治会	125
しらかば自治会	159	ひいらぎ自治会	150
さつき自治会	125	合計	826

1991（平成3）年4月には、ぽぷら自治会（北沓掛町2丁目・サンシティマンション）つばき自治会（御陵大枝山町5丁目）が、1993（平成5）年4月に、はなみずき自治会（北沓掛町1丁目・サンシティロイヤルマンション）が発足し、自治連合会に加入しました。

自治連合会の行事

1990（平成2）年秋、学区で最初に行われたクリーンデーの成功を伝える、広報『桂坂自治連合会だより』創刊号（1990.12.10）の記事です。

第1回ふれあいクリーンデー　成功裡に終わる

11月18日（日曜日）晴天に恵まれ、第1回「桂坂ふれあいクリーンデー」が無事終了しました。各自治会のクリーンデーを桂坂全体に普及し、お互いの自治会同士のふれあいの場になり、又、桂坂全体の美しい街作りに役立てればとの願いでしたが、事務局発表では約数百人の参加者とのこと、桂坂の意識の高さに改めて驚かされました。（略）

小、中学校、養護学校、ふれあいの里等も日を変えて実施して頂きました。又、西洋環境開発も背広を作業衣にかえて軍手を持っての参加でした。

来年は2回の実施を考えています。

翌1991年の5月には第2回クリーンデー、8月の17日、24日、25日には、各児童公園において、7つの自治会がそれぞれ分かれて夏祭りを実施し、9月には第1回行政懇談会が小学校のミーティングルームで開かれました。さらに10月には、第1回の学区民体育祭が実行委員会によって挙行され、小学校のグランドは終日、家族参加の和やかさの中で歓声に包まれました。

13の自治会による大きな連合に

その後、宅地分譲が進み、「桂坂」の街並みが整っていくとともに加入する自治会の数も増えていきました。

1993（平成5）年4月、副会長の菊池潤治氏が会長に就任、「住環境の保全整備」「各種団体との緊密化」の事業計画を明確にし、

(1) 自由な雰囲気の漂う桂坂
(2) 便利で暮らしやすい桂坂
(3) 安全安心のまち桂坂

を運営指針として取り組みました。

1995（平成7）年3月にけやき自治会（御陵大枝山町1丁目・2丁目）、1996（平成8）年4月に、にれのき自治会（御陵峰ケ堂町1丁目・3丁目）と、さくら自治会（御陵峰ケ堂町2丁目）、1997（平成9）年6月に、もみのき自治会（御陵峰ケ堂町2丁目）、1999（平成11）年3月にくすのき自治会（御陵峰ケ堂町3丁目・御陵大枝山町4丁目）が結成され、それぞれ親睦・交流を深め、安全で快適な生活環境を守ることなどを目的に掲げながら自治会の活動を開始しました。

あかしあ自治会

あかしあ自治会は、1989（平成元）年11月の発足です。「自然環境に恵まれた〈桂坂くつかけ〉を、心ゆたかな生活が過ごせる街」、いいかえれば「自然環境を守り、人と人とが支え合い、心のふれあい、うるおいのある街、そんな人にやさしい素晴らしい街をみんなの力で築きあげてい

きたい」（議案書「発足に際して」）とするあかしあ自治会は、設立の当初から、どの自治会の設立目的にも掲げられる「会員相互の親睦」を重視していろいろな行事を企画し実施しています。

はなみずき自治会と合同の夏祭りには、揃いのはっぴを着た男の子・女の子が神輿をかついで元気よく町を練り歩きます。11月に行われる「敬老会」はあかしあ会館に70歳以上のお年寄りを招き、団欒の場を設けて会食、長寿を祝います。12月は、初めは「子ども」対象だったものを今では大人も巻き込み、会館前では朝から賑々しく糯米をセイロで蒸し、臼に杵、町内挙げての「餅つき大会」です。

また、秋祭りの「焼肉パーティ」はあかしあ公園で盛大に開かれます。ふれあいの里・療護園の人たちを招き、町内すべての人が対象の親睦行事、年齢による有料無料はありますが、盛り上がらないはずはありません。

設立当初からのこうしたいくつものイベントの中で、人と人とのふれあいは深まり、自治会内、班内の協力関係もスムーズにいっているようです。「住環境の素晴らしい、平和で明るく健全な私たちの街をいつまでも保つ」ためには「自治会活動も単に『親睦を深める自治会行事』のみならず、自治会活動を通じて盛り上がる会員同士の結集した力」で「諸問題を受け止め対応し、解決していく必要がある」とは、永富進現会長の就任挨拶に見えることばです。（広報『やまびこ』47号・1999.4.28）

「会員相互の親睦」「会員の福祉安全」に重きをおく自治活動の１つのあり方として紹介しておきます。

各自治会の世帯数（1999年9月1日現在）

かえで自治会	291	さつき自治会	220
しらかば自治会	191	はなみずき自治会	199
あかしあ自治会	133	ぽぷら自治会	205
けやき自治会	135	ひいらぎ自治会	257
つばき自治会	241	くすのき自治会	132
にれのき自治会	182	もみのき自治会	212
さくら自治会	126		

桂坂の各種団体

「街づくり」は、地域に住む人たちの多彩な活動があってこそ活きたものとなり、その考えも地域にしっかり根を下ろしていきます。

桂坂には現在、20近い団体が「各種団体」として活動しています。最初にできる団体は、地域に自治連合会の組織がつくられる際に、行政の働きかけ・助言・指導があって生まれるのが常です。こうした団体は、京都市全域→西京区内→桂坂学区（支部）という順に、上部団体から下部組織へと縦に系列化された中で情報を交換し、協力し合って活動していきます。

桂坂でも、自治連合会の結成された直後に先ず、次のような委員会・協議会が生まれました。（括弧内は、初代会長、敬称略）

市政協力委員連絡協議会（湯浅忍自治連合会長兼務）
共同募金会・日赤奉仕団（菅谷公恵・しらかば）
保健委員協議会（松尾隆夫・かえで）
献血委員協議会（松尾隆夫・かえで）
体育振興会（永江望昭・かえで）
少年補導委員会（永井裕一・しらかば）

その後あい前後して、次の団体が出来ていきました。

民生児童委員協議会（湯浅忍・かえで）
文化普及委員会（田邊尚士・さつき）
交通安全推進協議会（森田啓三・あかしあ）
桂坂・山の手倶楽部（立野和之・ひいらぎ）
社会福祉協議会（湯浅忍・かえで）
防犯委員会（菊池潤治・しらかば）
　→防犯推進委員協議会（鹿野準一・かえで）

暴力追放協議会（菊池潤治・しらかば）
桂坂学区女性会（安楽つねみ・さつき）
　→桂坂地域女性会（山田まゆみ・かえで）

桂坂自主防災会（菊池潤治・しらかば）
桂坂消防分団（湯浅仁司・かえで）
桂坂小学校ＰＴＡ
大枝中学校ＰＴＡ

これを系統図で示せば次のようになりますが、行政からの連絡の窓口は、洛西支所の地域振興室です。

会員制をとる各種団体

ところで自治会は「会員相互の親睦をはかる」、「地域の発展に寄与する」、「住民の福祉」などを目的として結成されます。発足の段階で「会員相互の親睦をはかる」ことを第一に、子ども会や老人会を作ったり、ソフトボール大会など体育行事を企画したりして活動を開始し、この時に同好・親睦の会も産声をあげます。この同好・親睦の団体の中には、学区全体で１つにまとまり、その後、上部の団体に所属していくという径路をたどるものがあります。

山の手倶楽部や地域女性会がこの例で、両者は会員を募り、会費を出しあって会を運営します。

山の手倶楽部

「各種団体」の例として、元気に文化・健康維持の諸活動を展開している「山の手倶楽部」を挙げ、紹介します。

この倶楽部は、自治会の「福祉」事業の一つとして生まれた「老人会」や「シルバークラブ」などが「大同団結」し、1992年４月26日、「桂坂・山の手倶楽部」として新たに旗揚げしたものです。

倶楽部結成に先だつアンケート調査（1991年12月実施回答数 140名）で見ると、皆さんの「入会目的」は次の通りでした。

健康保持と親睦のため	79名
新しい住民なので仲間を作りたい	41名
教養娯楽のため	21名
以前住んでいた所で入会していたから	13名

この事前調査に拠り発足した山の手倶楽部の目的とその活動については、その５年目に『桂坂』（32号）に寄せられた立野和之初代会長の一文で見ることにします。

「高齢者の生きがい」

‥‥各世帯は新しい方々の集まりで、道に出会っても言葉一つかけるような状態でなく、まして高齢者にとっては淋しい日々であったと考えられます。

‥‥発足した折、会員による「新しい出会い」を大切にしましょうと、強く要望しました。お蔭で今では道では勿論、バスの中でも楽しいふれ合いが見られ、所期の目的が実りつつあると関係者一同、心より喜んでおります。

私たち高齢者は「生きがい」を持ち続けることが大切ですから、次のようなサークル活動により楽しんでいます。

サークルには、

旅行、史跡巡り、園芸、囲碁・将棋、写真、書道、一筆画、女性コーラス、歩こう会、ゲートボール、グランド・ゴルフ、手編み、女性部

等があります。各部門によって１週間のうち４日間、３日間、２日間、１日、また、月２回、月１回と回数は異なりますが、会員の中にはひとりで４～５つのサークルに加入して楽しんでいる方もおられます。その反面、指導される先生方は、ボランティア精神で大変ご苦労されています。この場を借りまして心から敬意を表する次第です。‥‥

なお、「山の手倶楽部」の会則には「おおむね60歳以上の者で、本会の趣旨に賛同し、入会を申し出た者」とありますので、60歳以下でも加入できます。

山の手倶楽部の皆さんは「楽しみ、喜び、安らぎ、そして感動を覚える」ことによって「毎日を明るく前向きに暮らすことを最善と考え、会員自身の趣味趣向に合った分科会」（立野和之初代会長「新しい出会いと生きがい」『桂坂』６号 1993.10.1）に参加し活発に活動しています。

文化系の分科会のうち書道、一筆画、生花、手編み、工芸などは従来、山の手倶楽部として「趣味の作品展」を開催してきましたが、昨年、10周年記念事業の一環として初めて地域女性会と一緒に「合同作品展」や写真で綴る『桂坂物語』を企画し、日頃の研鑽の成果を発表しました。女性コーラスも記念式典の中の記念行事で『歓喜の歌』など数曲を披露しています。女性部は福祉支援の活動を行い、「いきいきサタデー」の中で昔の遊びを伝えるなど小学生との交流も深めています。

各種団体の多様な活動

体育振興会や少年補導委員会は、会員制はとらず、役員と自治会選出の委員とで運営し、桂坂に住む私たちの参加できる諸行事を主催します。体育祭、自治会対抗の球技大会や夏のキャンプなど、行事を実施するその都度、参加希

望者を募る方法をとっており、案内は自治会の広報紙や回覧板を通して行われます。

そのほか各種団体の中には、行政、あるいは外部の民間団体より委嘱されて、私たちとのパイプ役を務めたり、保健・医療事業や社会福祉に関する活動を推進・支援したりする団体があります。

市政協力委員連絡協議会

月に2回、『市民しんぶん』とその「西京区版」が配布されます。これは京都市の動きを、全市的なものと行政区個々の細かな情報に分けて定期的に伝える広報紙ですが、このような京都市からの情報が各家庭に配布されるのは、実は「市政への協力」を任務として委嘱された市政協力委員の手を通してです。

この委員は毎年、自治会ごとに選ばれます。この委員の集まりである連絡協議会の会長は自治連合会長が兼務しています。

保健協議会と献血会

毎年の「市民検診」と「献血」はいづれも桂坂小学校で行われます。これらの実施日や要領はじめ、私たちの健康に関する保健所からの伝達事項やニュースは保健協議会を通し回覧板などで伝えられます。

「市民検診」は、地元医師会の協力を得て実施されますが、年1回のこの健康チェックは、病気の早期発見に繋がるもので、在宅の人、自営業の人には好都合の検診です。

受診料は、健康な人でも300円、70歳以上の人は「医療受給証」を持参すれば、もちろん無料です。

献血会の仕事は「献血」の世話です。日赤では、安全で有効な輸血が安定して行えるようにするために200㎖なり400㎖なりの献血と成分献血を望んでいます。採血した血液でもってコレステロールなどの生化学的検査を行い、その結果は後日、郵送で献血者宛に報らされます。これも健康チェックになります。

赤十字社資募集と共同募金

日赤の「社資」募集は、「すべての人々に人間の尊厳を」をテーマに毎年5月に実施されます。寄せられた「社資」は、国際的救援活動、災害救護体制の整備、医療事業、救護看護婦の養成、血液事業など社会福祉の増進のために活用されています。

「共同募金」は、民間の共同募金会が各都道府県を単位に毎年、10月1日から12月31日まで実施するもので、寄せられた寄付金の配分も都道府県の共同募金会が行います。「地域歳末たすけあい募金」や「ＮＨＫ歳末たすけあい義援金」もこの共同募金の一環です。

民間の募金ですから、地域の実情に沿い柔軟に民間の社会福祉の資金として使用されます。つまり、地域の社会福祉事業の推進と民間の社会福祉施設の整備・充実などの事業に役立てられることが目的で、社会福祉協議会や様々な福祉活動団体にも配分されます。京都府以外、あるいは国外の社会福祉には使用できません。

平成10年度の府内の寄付総額は 504,229,691円、そのうちの「一般募金」は 360,963,078円でした。西京区の場合は14,605,454円。この「一般募金」は、知的障害者福祉事業、児童福祉事業、社会福祉施設などに配分され、「小地域福祉事業」を行う54団体のひとつに数えられる西京区社会福祉協議会にも、8,727,751円が配布されました。

寄付した私たちの「地域で生きる」寄付金なのです。

平安講社

平安神宮は、1895（明治28）年10月22日に行われた「平安遷都1100年祭」に、市の総社として創建され、桓武・孝明の両帝を合祀します。

この時、大祭・建造物の維持保存を目的に、市民によって平安講社が組織され、記念行事として、葵祭・祇園祭とともに京都3大祭の1つである「時代祭」も始められました。西京区と右京区は平安講社・第9社に属しています。

西京区は毎年、都大路に明治から延暦時代へ逆上って各時代の風俗絵巻きを展開する「時代祭」の行列では、吉野時代の風俗で「楠公上洛列」を勤めることになっており、主将の楠正成、副将の正季、そのほか侍大将など各学区が回り持ちで奉仕します。1996年には菊池自治連合会長が楠正季役の騎馬武者として大役を勤めました。